平成２９年９月 経営協議会議事録

Ⅰ．日　時　　平成２９年９月２１日（木）　１４時００分～１６時０８分

Ⅱ．場　所　　学術総合センター　一橋講堂特別会議室１０１～１０３（１階）

Ⅲ．出席者　　徳久学長、有馬、犬養、河田、黒木、島田、銭谷、西堀、舩橋、正宗、武藤、
中谷、渡邉、関、山田、猿渡、掘、小澤、佐藤、中山、山本
齊藤各委員

ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ　　桑古監事
（欠席者：加賀見、香藤、萩原、宮坂、金原各委員）

Ⅳ．前回審議議事録について
原案のとおり承認された。

Ⅴ．審議事項（◎学外委員、○学内委員）

１．ソフト分子活性化研究センターの設置について
中谷理事から、ソフト分子活性化研究センターの設置について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見は以下のとおり。

◎　これだけ特徴的な試みであれば、文部科学省だけではなく、NEDO、経済産業省、厚生労働省なども注目すると思うので、申請してみてはどうか。

◎　千葉大学がヨウ素をテーマとしてセンターを設置することはすばらしい。また、地方創生という意味においても、千葉大学が核となりセンターを設置することはすばらしいが、これを実施していくためには、学長を中心としたリーダーシップが大変重要になる。最先端研究を全学センターとして育てていただきたい。

◎　ヨウ素研究やソフト分子活性化の分野が今新たに注目され、千葉大学が研究をすることになった背景を教えてほしい。

○　ヨウ素研究は、約２０年前からヨウ素研究学会を千葉大学内に設置しており、その中でヨウ素の用途は触媒として注目されていたが、他の金属の触媒と違い、当時は必ずしもメジャーではなかった。一方で、最近はヨウ素が比較的安価な触媒として応用できることが見えてきており、太陽電池原料のシリコンに代わるものとして高純度のものを生産する観点からも期待されている。

○　ヨウ素は貴重な価値があるものとして、大事に扱い、純度を高める他再利用することも考えている。現時点で建物の経費は付いたが、研究費は付いていない。今後は NEDO を含めてセンターの教員が外部から研究費を獲得し、企業と共同研究を進めていくことが本質であると考えている。

◎　「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター」として、生命科学から解析系までの部門があると整理したほうがよいのではないか。特に、設置決定や竣工式の際にその都度で記者会見を行って積極的にアピールするなど、上手に宣伝されたほうがよい。

◎　「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター」という名前は非常にはっきりしている。地方創生の側面もあるが、応用研究の側面も重要であることから、既存の企業と関係を構築して、研究を進めることも大切であると思う。例えば企業家をこの分野から生み出すような仕組みを考えているのか。

○　直接ここからということはないが、既存のベンチャービジネスラボラトリーがあるので、積極的に連携を図っていくことを考えたい。

○　とりわけ研究費の獲得が１番の問題であり、それに向けて特許の取得や企業との共同研究を行わないといけないと考えている。
　センター名称の変更がある場合は、再度審議させていただくが、これまでも複数回にわたり関係者との議論を経て設定した名称であることから、原則としてはこのままの方向で進めさせていただきたい。

Ⅵ．報告事項（◎学外委員、○学内委員）

１．平成３０年度概算要求等について

　猿渡理事から、平成３０年度国立大学法人全体の概算要求等の状況及び千葉大学運営費交付金等の概算要求について、資料に基づき説明があった。

主な意見は以下のとおり。

◎　園芸別科について、廃止理由の「社会情勢の変化に対応するため」とはどういうことか。

○　園芸別科は長い歴史があり、農業後継者を短期間で育成することを目的としてきた。以前は５０名の定員であったが、数年前に１６名に縮小した。それでも志望者が少なくなり、最近は数名という状況が続いていた。廃止については以前に各所から反対意見も出されたが、園芸別科に変わるものとして４年間のビジネスプログラム等を新たに設置し、農業を世界に展開できるような人材を養成する方向性を改めて説明し、ご理解を得たところである。

引き続き、中山副学長から「治療学人工知能（ＡＩ）研究センター」について説明があり、関理事から補足説明があった。

主な意見は以下のとおり。

○　医療ビックデータ法が施行された。その背景としては肥大化した医療費の抑制があると考えており、我々が折角その分野においてトップランナーとして走っているのであれば、将来、他の国立大学附属病院からデータを集めて、千葉大学がイニシアティブを握って国是にあった方向感を持つことはすばらしいことだと思う。その際、千葉大学附属病院の情報は他の機関へは出さないというスタンスになるのか、若しくは他からも頂くが、千葉大学からも情報提供するというスタンスになるのか、この点はとても大事なことで、その方向感の見極めがなされればすばらしいプロジェクトになると思う。

○　電子カルテソフトは各病院によって異なっており、コンパーチブルになっていないことが大きな問題となっている。まずは、千葉大学ＡＩセンターが、検査データと診断データ、そして、そのしっかりしたデータと患者の状態をリンクして信頼性のあるものにする段階である。また病院をまたいで実施することは、厚生労働省も行おうとしているがうまくいっていない。規模は小さくてもどこでも通用するようなものを千葉大学で作りたい。

◎　ＡＩ、ＩＯＴなど近年急速に伸びてきたので、医療をめぐる一連のＩＣＴ化はこれから一気に進む可能性がある。問題は、ビックデータを各医療機関が自分で囲い込んでしまい、１つ１つの機関のデータだけが中途半端ということになってしまうこと。もっと大きなデータとなった場合、千葉大学附属病院はデータもたくさん持っている強みがあるので、リーダーシップを持ってＡＩの医療分野での存在感を示していただきたい。

◎　大変な事業だと思う。一方で、人員要求が２名のみだが、果たして千葉大学だけでできることなのか。

○　今一番力を入れているのが、サーバーを持って運用していくための資金であり、まずはその部分をスタートとして考えている。その他にもいろいろな問題があり、包括的な整理は出来ていないが、共同的に進んでいるところを中心に少しでも前に進めていきたい。大手企業に比べると少ない資金でどのようなアイデンティティを出していくか知恵を絞らなければならない。

○　ある疾患に対するＡＩを作るという研究と、出来たＡＩを使って新しい分野を開く応用研究と２つある。我々がすべての診断や、出来ているＡＩを更に進化させたり、いろいろな方がプログラムを作り、どちらが的確に診断させるかを競わせたら、限りなく分野が広がり、とても千葉大学１つのテリトリーではなくなる。ところが、出来たワトソンの診断機器を使って、どんな新しい研究を伸ばせるのかというところは、ＡＩを実際に使っているところがないと利用できないと考えている。千葉大学のＡＩセンターは５部門を想定しているが、基礎研究部門は出来たＡＩを使って新しい何かを生み出す、企業との共同研究部門は病理データをいかに正しい診断をするＡＩを共同で作っていくかなど、いろいろなグループがあり、１つのセンターが出来ていると考えている。決して本学のＡＩセンターがすべてＡＩを作るためのセンターだとは考えていない。

◎　基礎研究部門と共同研究部門があるが、基礎研究部門はすべての大学の研究機関が関係すると思う。問題は千葉大学にとっての日本の画像処理を使って、ある部分については千葉大学がＮｏ．１であるという得意分野を作ることが大事だという理解でよいか。

○　仰る通りで、学内の研究でも高いレベルのところにＡＩを入れると、どの分野でも研究が更に伸びるという考え方で取り組んでいる。

○　基盤技術として絶対に必要な分野で、限りなく広がっていく。自分たちがＡＩの機器を作ってもいいし、それを応用に使って共同研究を進めて更に発展していく、という時代になっている。是非、千葉大学の中にセンターを作り、全学でＡＩセンターに相談できるようなシステムが必要ではないかと考えている。

２．「特定分野先導研究拠点プログラム」について

猿渡理事から、「特定分野先導研究拠点プログラム」について、資料に基づき説明があった後、関理事からグローバルプロミネント研究基幹の仕組みについて、資料に基づき説明があった。引き続き、中山副学長から、「本プログラムに係る本学の構想」について資料に基づき説明があった。

３．平成２９年司法試験の結果について

石井副学長（専門法務研究科長）から、平成２９年司法試験の結果について、資料に基づき説明があった。

４．平成３０年度経営協議会開催日程（案）について

田中総務課長から、平成３０年度経営協議会開催日程（案）について、資料に基づき説明があった。

５．その他

①世界大学ランキングについて

中谷理事から、ＴＨＥ世界大学ランキングについて、資料に基づき説明があった。

②平成２９年度戦略的創造研究推進事業（CREST）について

関理事から、平成２９年度戦略的創造研究推進事業（CREST）について、資料に基づき説明があった。

③本学の学生による不祥事の経過報告について

渡邉理事から、本学の学生による不祥事の経過報告について、説明があった。

④大学院医学研究院における試薬（硝酸銀）の盗難届の提出について

中谷理事から、大学院医学研究院における試薬（硝酸銀）の盗難届の提出について、説明があった。

以上